中東基礎知識

アラブ諸国におけるビジネスの基本について
（第１回）アラブ文化と歴史と宗教の影響について

㈱湾岸経済研究所　代表取締役社長　田中　保春

はじめに

大変お世話になった中東協力センターから、「アラブ文化の概要やビジネス・マナーに特化した連載投稿」のご依頼をいただきました。サウジアラビアを中心に25年以上の現地勤務をもとに、「出涸らし」とは言いませんが、筆者の知見が少しでもこれからの日本を担う方々のお役に立てれば光栄と思い、喜んでお受けしました。さまざまなビジネスを通して今日まで関係した国は、サウジアラビアなどGCC諸国、そのほかイラク、イエメン（当時は北イエメン）、チュニジア、そしてプライベートでよく訪問したのはシリアでした。

社会人になってからは、プラント、投資銀行、ベンチャーキャピタル、外国直接投資、企業財務などのリアルビジネスの分野で、日本や外国企業の立場から中東と関わり、またサウジアラビアの政府や企業の立場から日本など海外企業と取引や助言を行ってきました。筆者は中東の専門家や研究者ではないので、学術的や専門的な解説はできません。そのため、中東に携わっておられるビジネスパーソンを読者と想定し、できるだけビジネスに直結する実践的な心得、予備知識、マナー等に絞ってお伝えするつもりです。

中東と言っても、国や都市によって大きな違いがあります。サウジアラビアでも、首都リヤドと商都ジェッダでは生活習慣、価値観、ビジネスのやり方などに大きな違いがあります。原稿の字数には制限があり、また読者の皆さんの時間にも限りがありますので、「これだけは覚えておいて！」と思うことを述べるつもりです。

今後、読者の皆さんはここで述べたことと矛盾する場面に遭遇されるかも知れません。しかし、それはアラブの多様性を知る貴重な経験となります。最後に、筆者は思ったところを率直にストレートに述べるつもりですので、反感やご批判があるかもしれません。その点は最初にご了承ください。

アラブ文化の歴史

イスラームの聖典「アル・クルアーン」（日本では「コーラン」と呼ばれる）はアラビア語で記されており、そのアラビア語を話す人たちの国々が「アラブ」です。イランやトルコ等はイスラームの国ですが、「アラブ」には含まれません。

アラブ文化と一口で言っても、アラビア語を話している人たちはすべてがイスラームを信仰しているとは限りません。もちろん、サウジアラビアの様に全国民がイスラームを信仰する国は別ですが、ヨルダン、エジプトやシリアなどに行けば、アラビア語を話すけれどもキリスト教やユダヤ教などを信仰する人たちが大勢います。イスラーム以外の宗教を信仰するアラブ人の挨拶のなかには、当然のことですが、「アッラー」が

含まれます。しかし、そもそもイスラームはユダヤ教とキリスト教の「いいとこ取り」の様なもので、３つの宗教は同じ神で、兄弟みたいなものです。

次に、アラブ文化の歴史的背景ですが、古い順に分けると頭に入りやすいと思います。またアラビア語が誕生したのは西暦４世紀頃とされているので、正確に言うとアラブ文化ではありません。

●古代文明：世界最古の四大文明のひとつと呼ばれるメソポタミア（現在のイラク）は紀元前4000年頃に興りました。しかし当時、アラビア語の起源であるアラム文字はまだ生まれていなかったので、アラブではありません。「目には目を、歯には歯を」のハンムラビ法典は有名ですが、その規定は同害報復です。半沢直樹の「やられたらやり返す、倍返しだ‼」ではありません。

エジプト人は「こちらが最古だ」と主張するかもしれませんが、もう一つの古代文明はピラミッドでおなじみの古代エジプトです。初代王朝は紀元前3150年頃に成立したとされています。

●サバア（又はサバ）王国：紀元前８世紀が起源という説がありますが、もっと後という説もあります。サバ王国は旧約聖書にあるシバ王国と同じと見なされることが多く、昭和世代には懐かしいポール・モーリアの「シバの女王」を思い出させます。シバの女王がヘブライ王国のソロモン王に面会するため、古代イスラエルまで旅をしたことや、史上最古のダムはイエメンの今のマーリブにあったのは有名です。

ここで少し話が飛びます。サウジアラビアに出張や駐在する方にとって、関心事項のひとつは部族です。アラビア半島だけでなく、シリア、ヨルダン、イラク等には85以上の部族が存在し、サウジアラビアには45前後の部族が存在すると学術書は述べています。そもそも、サウジアラビアでもジェッダには部族や部族をルーツとする国民はほとんど皆無です。そして、アラブに存在する部族はこのサバア王国が存在していたイエメンと非常に深い関係があり、アラブに存在する部族の８割以上は祖先がイエメンだと言われています。部族の話は次回に詳しく述べる予定ですので、ぜひお楽しみに！

●ナバチア（ナバテア）王国：紀元前４世紀頃に興り、紀元前１世紀頃から域内交易を独占していたナバチア人が建設したペトラ古代遺跡（ヨルダン）は有名です。ペトラ遺跡に次ぐ規模を誇るのがサウジアラビアの古代遺跡アルウーラ、2020年１月にサウジアラビアのムハンマド皇太子がG7首脳のなかで最初にプライベートテントに招待、会談を行った相手が安倍総理（当時）でした。

●イスラーム文化：７世紀に預言者ムハンマドがイスラームを創始、その後イスラーム文化は伝統的なアラブ文化と調和、さらに古代ギリシャ、ローマ、ペルシャ、インドの哲学、医学、化学、建築など多くの分野の知識を吸収し、独自の発展をしました。アラブ人には、「スペインのアルハンブラ宮殿を訪問した時に、イ

筆者紹介

1955年京都市生まれ、大阪外国語大学（現、大阪大学）卒、リバプール大学MBA、ミシガン大学院Execコース修了。IHI、仏銀ソシエテ・ジェネラルのちにソシエテ・ジェネラル証券（湾岸産油国カバレッジ）を経て、サウジアラビア民間財閥のファミリーオフィス・アドバイザー、中東協力センター非常勤アドバイザー、サウジアラビア総合投資院＝SAGIA（現、投資省）リヤド本部にて総裁アドバイザー＆ジャパンデスク、みずほサウジアラビア株式会社代表取締役会長、サウジ地場企業（製造業）の社外取締役や監査委員会長、リヤドのプリンス・スルタン大学ビジネススクール理事、サウジアラビアの非営利団体の顧問などに従事、2022年に株式会社湾岸経済研究所を設立

スラーム建築の美しさに非常に感動した！」とか、「ポルトガルのコインブラを訪れた時に、イスラーム文化が色濃く残っていて、感動した！」とか実体験を話してあげると、大変喜ばれます。

サウジアラビア、とりわけ宗教的に保守的で厳格なリヤドでは、アラブ文化というよりはイスラーム文化という視点の方がフィットします。筆者の知人のなかには、「文化や歴史で飯が食えるなら、誰も苦労せんわい！　ピラミッドだけで全国民が食えるのか⁉」と露骨に批評する人がいます。（誇り高いその国民の皆さま、お詫びします。）

さて、ビジネスでお付き合いするサウジ人と文化について話す機会はめったにないと思います。筆者は22年間のリヤド勤務で、文化について話をした記憶はほとんどなく、いつも相手からお笑いを取ることに全力集中していました。「昔、日本人のアラビア語の先生から『ラクダに乗ってスーク（市場）に行きましょう！』をアラビア語で言えれば、餓死はしない。」と教えられたけど、初めてリヤドに行った時には市内のどこにもラクダはいなかった！」とか、「羊の丸焼きを初めて提供された時、割いたお腹から腸が出てきたと思ったらパスタだった！」とか、筆者の話題はいつも実体験で即物的でした。もっとも筆者は文化や歴史といった高尚な話題でアラブ人を引き込む知識も才能もありません。

また話は少し飛びますが、関西人は小学生の頃から、クラスの仲間からどうしたら受けるか（笑いを取れるか）の厳しい鍛錬を積みますので、その姿勢は大人になっても変わりません。おしゃべり好きで、相手の笑いを取ることに長けた関西人、とりわけ大阪人はアラブ人の懐に入るのはそれほど難しいことではないと思います。アラブ人は「三度の飯よりおしゃべり好き」なのです。

文化の話題を振っても、キョトンとしてあまり乗り気でない相手に矢継ぎ早に質問するのは止めましょう。相手は迷惑です。サウジ人は紳士的で社交的なので、嫌な表情はみせませんが、素っ気ない返答があれば、話題を変えましょう。「文化よりはビジネスや！ただし、文化活動で儲かるなら話は別やけど・・・」とか、「おもろい話を期待していたのに・・・」が本音の様に思います。

次に歴史ですが、こちらもサウジ人を含め湾岸産油諸国のビジネスパーソンは歴史の話題で盛り上がる確率は低いと思います。アラブ歴史の知識を一杯頭に詰め込み、話を始めても、「マーシャアッラー（アッラーの心のままに）、よく知っているね！」と褒めてくれるかもしれませんが、それでビジネスがうまく行くことはないでしょう。そもそもサウジアラビアで学ぶ歴史はイスラームの歴史がほとんどで、それ以外の歴史は学校ではあまり教えないので、関心が薄いのです。「ところで、あんた何しに来たの？」と言われそうです。

近年注目を浴びている「アルウーラ」や「マダイン・サーレハ」といったサウジアラビアの古代遺跡は、10年程前にはほとんど注目されない、欧米人や日本人以外には人気のない場所でした。脱石油依存を目指す「ビジョン2030」でサウジ政府が観光資源の掘り起こしを始めて以来、サウジアラビアの古代遺跡は世界的に注目を浴びるようになりました。

宗教（イスラーム）の影響

最も重要な点は、イスラームは単なる宗教にとどまらず、ムスリム（イスラム教の信者、帰依する人の意）やムスリマ（女性のムスリムの意）にとって社会生活すべてを律する最も重要な行動指針であることです。イスラームの教えは日常生活のすべてや価値観に深く浸透、反映しています。イスラームを批判したり、茶化したり、冒涜するような言論や行為は絶対してはいけません。かつては、３つのアラビア語の頭文字を取った「IBM」がアラブの習慣を揶揄した代名詞となっていた時代がありましたが、こちらはこのシリーズ第３回（価値観と行動規範）で述べる予定です。

とにかく、イスラームに対しては尊厳と尊敬をもって接しましょう。会社のモスク（礼拝所）などに置かれている聖典「アル・クルアーン」も大事に丁寧に扱いましょう。「ウドゥ」（礼拝前に体の一部を水で洗うお清めの行為）により洗面所の床が水浸しになるのを嫌う日本人が多いのですが、寛容が大切です。

「ムスリムは４人まで奥さんを持てると聞きましたが・・・」とか、「アルコールは飲んではいけないのでしょうか？」といったステレオタイプで興味本位の質問は絶対に止めましょう。相手からの信頼や信用を失います。

ビジネスに及ぼすイスラームの影響力は、国や地域によって千差万別です。サウジアラビアにはマッカ（日本では「メッカ」と呼ばれます）とマディーナ（同じく、日本ではメディーナ）の二大聖地があり、国王は the Custodian of Two Holy Mosques（二聖モスクの守護者）と呼ばれます。そのため、サウジアラビアは宗教的に最も厳格だと言われることが多いのですが、近年はかなり緩やかになりました。それでも、多くの政府高官や、有力財閥を生み出しているカシーム州出身の方は宗教的に敬虔な方が多いのが特徴です。細かい話（上級編）ですが、同じカシーム州でも州都ブレイダは極めて厳格ですが、27km 離れたウナイザはブレイダほど厳格ではなく柔軟で開放的です。

契約交渉でイスラームの影響が出る可能性があるのは、「金利」や「現在価値」かもしれません。もちろん、欧米の大学やビジネススクール等でファイナンスや経営を学んだアラブ人や海外企業との取引が多い大企業のビジネスパーソンは例外です。しかし、公立学校では金利については教えませんし、宗教的に厳格な家庭では金利の話題はしません。そもそも金利は「ハラーム」（イスラームの教えで禁じられているもの）なのです。この辺についても第３回で述べるつもりです。

最後になりましたが、ビジネスで理解しておくべき ABC の A は次の通りです：

⑴　イスラーム暦（「ヒジュラ暦」）は、西暦（グレゴリアン暦）より約11日短いため、ラマダーン月（断食月）やハッジ月（大巡礼）は毎年一定ではなく、約11日早まり、約33年で一巡することになります。筆者は29歳と62歳の時にサウジアラビアで同じ季節のラマダーン月を経験しました。

⑵　ラマダーン月やハッジ月の終わりには「イード」と呼ばれる３日間の祭りとなり、休みになります。民間企業は政府の発表を受けて、会社独自の休暇期間を決めます。出張など、西暦ベースだけで予定を組ま

ないことが大事です。

⑶　自分の仕事場や会社内の礼拝部屋ではなく、外のモスクに礼拝に行く人もいますので（特にラマダーン中)、オフィスが空っぽになることはよくあります。理解と寛容の気持ちを忘れずに。

⑷　礼拝時間になると会議は一旦中断されます。タイミングは人によって千差万別ですので、相手のペースに任せるのが良いでしょう。

⑸　取引先が訪日、来社する時には、静かな礼拝部屋を準備し、礼拝用の敷物や「ウドゥ」のための洗面所を用意しましょう。また、マッカがどの方向にあるかを示す紙を「キブラ」として礼拝部屋の床や壁に貼っておくと喜ばれます。

床に埋まったキブラを示す標識。こうした設備の多いイスラーム圏ならば、常にキブラコンパスを持ち歩く必要はない。

（出典：ウィキペディア（Wikipedia）

⑹　ラマダーン月にはオフィスでの飲食は避けましょう。それがイスラームへの敬意です。どうしても水を飲みたい時は、こっそり隠れて飲みましょう。

⑺　日本で相手を食事に誘う場合、豚肉（ハムも含め）は注意されると思いますが、うっかりしがちはベーコンや豚エキスです。ハラール・レストランでないと駄目と思う方もおられるかもしれませんが、そんなことはありません。焼肉や鰻やお寿司が大好きなアラブ人も大勢います。

　ビジネスにおいて、アラブ文化やイスラームに対する理解と尊重は重要です。相手の文化に対する敬意を示すことで、信頼関係を築きやすくなります。

＊本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。